

使徒の働き25章 「イエスが生きている主張」

1A エルサレムからローマへの証し 1-12

1B パウロに対する妬み 1-5

2B カイサルへの上訴 6-12

2A ローマ法からイエスの復活の話 13-27

1B ユダヤ教に通じる統治者 13-22

2B 見つからない訴える理由 23-27

本文

使徒の働き 25 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びが 24 章まで来ましたが、今朝は 25 章を一節ずつ見ていきたいと思います。私たちは、パウロが、カイサリアの官邸に監禁されたところを見ました。フェリクスが総督で、エルサレムから大祭司と長老たちが来てパウロを訴えるも、パウロが弁明して、彼らの訴えに証拠がないことを話しました。明らかに無罪なのですが、フェリクスはユダヤ人の機嫌を取るために、裁判の延期をしました。その間に、妻ドルシラと共に、イエス・キリストへの信仰について聞くためにパウロを呼び出しましたが、パウロは、「正義と節制と来るべきさばき(24:25)」について語りました。恐ろしくなったのですが、フェリクスは、「折を見て、また呼ぶことにする。」と言いました。彼はまた、パウロからわいろを受け取りたい下心もありました。それで不当にも、二年間も拘束したままにしていたのです。

けれども、フェリクスは、その暴政によって罷免させられます。それで新任として、27 節ですが「ポルキウス・フェストゥス」が総督となります。フェストゥスは、就任早々、フェリクスが残っていた囚人パウロのことを取り組まざるを得なくなりました。そこでパウロのローマ行きが決定的となります。覚えていますか、パウロがエルサレムで拘束されている時、夜にイエス様がそばに立たれて言われました。「23:11 あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならぬ。」25 章は、フェリクスの政治的な思惑が書かれているやり取りになっていますが、その中でも、主が確実に働かれている姿を見ることができます。私たち、感じることはないですか？あまりにも混乱し、どうしようもなくなり、「こんなところに主がおられるのだろうか？」とがっかりしてしまうことを。しかし、そんな中でも主は確実に働いておられるという希望を見いだせると思います。

1A エルサレムからローマへの証し 1-12

1B パウロに対する妬み 1-5

¹フェストゥスは、属州に到着すると、三日後にカイサリアからエルサレムに上った。

フェストゥスは、紀元 59-61 年にユダヤ属州を治めていた総督です。皇帝ネロによって任命され

ています。彼についての評価は、フェリクスと対比して、良いものです。フェリクスが暴力で統治したけれども、フェストは知恵で治めようとしていたというものです。彼は自分がカイサリアに到着すると、すぐに、エルサレムに向かっています。エルサレムを治めるのがどれほど大変であるかを彼は知っていました。そこで、ユダヤ人の指導者たちと良い関係を築いておく必要があると考えていました。

話が前のめりになりますが、フェストゥスは、人間的にはとても良い政治家であり、良く治めていたと言えます。それは高く評価できるし、感謝すべきことですが、物事を上手に収めるということが必ずしも良くないことがあります。それは、福音が伝わらないという問題です。

エペソで騒動が起こった時のことを思い出してください。19章ですが、アルテミス神殿の模型を作っていた銀細工人が、多くの人がキリスト者になって買わなくなっていたので、パウロのことで騒動を起こしました。それで町中が大混乱に陥り、皆が劇場になだれ込みました。パウロはそこに入り込もうとしましたが、身の危険を案じる仲間がとめました。そこに、町の書記官が来ました。彼は、冷静に、パウロたちは神殿を汚していないし、女神を冒瀆してないと言いました。そして、エペソの町が、偉大な女神アルテミスの守護者であることを、誰も否定できないと言いました。両者の言い分をくみ取っているのです。その上で、騒擾罪になりかねないから解散しなさい、訴えがあるなら裁判がある、と言って、その場を沈めたのです。書記官として、真つ当なことをしています。けれども、それでパウロはエペソを立ち去っています。そう、福音宣教という土俵から、騒動を収めるという内容にいつの間にか変わってしまったからです。私たちに、何か大変なことが起こって、その問題の渦中に、福音に触れるということがありますね。問題が起こることとは、必ずしも悪いことではありません。イエス様に会えるチャンスでもあるのです。それが、上手に事が収まると、福音の光にも陰りが出てきます。

そこで、フェストゥスは知恵のある動き方をしています。けれども、エペソの町の書記官のように、福音については全く関心のない人物、世俗的な人です。けれども、それでも神は、いい意味で、彼がジレンマに陥るように導いて行かれます。

²すると、祭司長たちとユダヤ人のおもだった者たちが、パウロのことを告訴した。³そして、パウロの件で自分たちに好意を示し、彼をエルサレムに呼び寄せていただきたいと、フェストゥスに懇願した。待ち伏せして、途中でパウロを殺そうとしていたのである。

彼らは、新しい総督になったので、改めて訴えやすい良い機会だと思ったのです。けれども、すでにあのことが起こってから二年が経っています。それでもパウロを殺す思いを抱いていました。相当の執念です。

⁴しかしフェストゥスは、パウロはカイサリアに監禁されているし、自分も間もなく出発する予定であると答え、⁵「その男に何か問題があるなら、おまえたちの中の有力者たちが私と一緒に下って行って、彼を訴えればよい」と言った。

知恵のある対応です。ユダヤ人に恩を売りたくても、パウロは、今、カイサリアに監禁されています。ローマの権威によって監禁されているのですから、ローマの裁判で裁かれるべきです。だからカイサリアに来なさい。けれども、時を移さずに裁判を開くから、そこで訴えなさいと言っています。

2B カイサルへの上訴 6-12

⁶フェストゥスは、彼らのところに八日か十日ほど滞在しただけで、カイサリアに下り、翌日、裁判の席に着いて、パウロの出廷を命じた。

パウロにとって、これは何度目の弁明になるのでしょうか？ユダヤ人の前では、神殿において、そしてサンヘドリンにおいてありました。そしてローマ総督に対しては、フェリクスの前で、そしてここフェストゥスの前で行います。その一つ一つが、イエス様を証しする機会であるとパウロは見なしています。

⁷パウロが現れると、エルサレムから下って来たユダヤ人たちは彼を取り囲んで立ち、多くの重い罪状を申し立てた。しかし、それを立証することはできなかった。⁸パウロは、「私は、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対しても、カエサルに対しても、何の罪も犯してはいません」と弁明した。

前回のフェリクスの前での法廷と同じ展開です。彼らは立証ができませんでした。内容は、ユダヤ人の律法について、宮を汚したということについて、またローマで騒ぎを起こしているということについてだったようです。三つのうち、最後の二つがローマの法に触れます。

⁹ところが、ユダヤ人たちの機嫌を取ろうとしたフェストゥスは、パウロに向かって、「おまえはエルサレムに上り、そこでこれらの件について、私の前で裁判を受けることを望むか」と尋ねた。

フェストゥスは、パウロは罪を犯していないことがはっきりと分かりました。それでも、敢えてエルサレムに行って、そこで私の前で裁判を受けることを望むか？と尋ねています。ユダヤ人の機嫌を取ろうとしていたためです。これが、ピラトが総督であった時からの大きな課題でした。いかに多神教のローマが、一神教のユダヤ教を治めるのか？という問題です。またユダヤ人は民族としての結束が強いです。それで、ローマの平和と秩序を保つためには、指導者たちの要求をある程度、飲まないといけませんでした。

しかし、そのためにピラトは、自分が裁判官として与えられていた良心に反して、十字架刑を下し

ました。フェリクスは、裁判を不当に延期しました。そしてフェストゥスもその圧力に屈しています。

¹⁰すると、パウロは言った。「私はカエサルの法廷に立っているのですから、ここで裁判を受けるのが当然です。閣下もよくご存じのとおり、私はユダヤ人たちに何も悪いことをしていません。¹¹もし私が悪いことをし、死に値する何かをしたのなら、私は死を免れようとは思いません。しかし、この人たちが訴えていることに何の根拠もないとすれば、だれも私を彼らに引き渡すことはできません。私はカエサルに上訴します。」¹²そこで、フェストゥスは陪席の者たちと協議したうえで、こう答えた。「おまえはカエサルに上訴したのだから、カエサルのもとに行くことになる。」

パウロは、ローマ皇帝に訴えました。これはローマ市民が持っている権利です。不当な扱いを裁判で受けていると思う時に、カイサルに上訴する権利がありました。「私はカエサルに上訴します。」というのと、「おまえはカエサルに上訴したのだから、カエサルのもとに行くことになる。」というのは、裁判において出て来る決まり文句です。

ところで、当時の皇帝はネロです。ネロは、その統治の前半と後半でその性格が大きく異なります。前半は穏健でありましたが、大火事がローマで起こって以来、後半は残忍な皇帝となり、二回目にパウロがネロの前に連れて行かれた時は死刑になりました。けれどもここは、まだ前半部分です。パウロは、カイサリアに政治的思惑でこれ以上、無駄に置かれたくないと思ったでしょうし、ユダヤ人が自分を殺す陰謀はまだ続いているかもしれないとも感じ取っていたのかもしれませんが、自分に与えられた権利を行使して、この状況から抜け出すことに決めました。

しかし、これが、イエス様がパウロに語られていたことの成就につながるのです。「23:11 あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならない。」ローマでの証しにつながっていきました。皇帝ネロの前で証しをするだけでなく、軟禁されている時に訪れたユダヤ人たちにも証ししています。使徒の働きの最後、28章は、パウロがローマで神の国を語っている姿で終わっています。パウロとて、このようなかたちで、つまり囚人のままでローマで証しをするとは、思っていなかったことでしょう。しかし、神は、どんな状況が起こっていようとも、私たちの思いを超える形でご自分の意図しておられることを成し遂げられるのです。

2A ローマ法からイエスの復活の話 13-27

フェストゥスにとって、大きなジレンマに陥りました。自分はパウロが無罪だと思っています。けれども彼は上訴しました。彼はローマ市民ですから、その権利を認め、保護しなければいけません。けれども、裁判で無罪だと分かっているのに、釈放せずにそのままカイサルのところに連れて行ったらどうなのでしょう？ 訴状となるような訴状もなく連れて行ったら、カイサルに対する心象が著しく悪くなります。そこで神は、また別の道を開かれるのです。パウロがローマに行く前に、カイサリアで証しをする機会をくださいます。

1B ユダヤ教に通じる統治者 13-22

¹³ 数日たって、アグリッパ王とベルニケが、フェストゥスに敬意を表するためにカイサリアに来た。

アグリッパ王とベルニケが、フェストゥス総督の任命を祝うために表敬訪問していました。このアグリッパとは、ヘロデ・アグリッパ二世のことです。使徒ヤコブを殺し、ペテロも殺そうとしたヘロデは、ヘロデ・アグリッパ一世でした。彼は演説している時に、神の使いに打たれて、このカイサリアで死にました。アグリッパ二世は、このアグリッパ一世の息子になります。

ヘロデ大王が死んだ後に、彼の治めていた領地は息子たち分割されました。アルケラオがユダとサマリア地方を任されましたが、彼の暴政ですぐに失脚させられ、そこはローマが直接統治する、属州となり、ユダヤ属州と呼ばれます。カイサリアが首都でした。その他は、ガリラヤとペレア地方はヘロデ・アンティパスで、ヘロデ・アグリッパ一世の叔父にあたります。バプテスマのヨハネを斬首し、イエス様がエルサレムで裁かれた時にそこにいたヘロデです。父のヘロデ・アグリッパ一世がその地方をアンティパスに代わって治め、父がカイサリアで死んだので、30歳ぐらいの若い時に領主としてその地方を任されました。

ベルニケは、アグリッパ二世の妹です。同棲関係となりました。つまり、近親相姦です。そして最後は、エルサレムを滅ぼした将軍ティトスの妻となりました。先の、総督フェリクスの妻ドルシアは、アグリッパとベルニケの妹になります。こういった関係です。けれども、統治としてはヘロデ家の中でも最も評判の良い人物です。彼が最後のヘロデ王朝の人物となります。

ヘロデ家は、ローマにとって必要な存在でした。彼らはイドマヤ人、すなわちエドム人の末裔です。けれども、紀元前二世紀に、ユダヤ教に改宗させられます。ですから、宗教はユダヤ教なのです。それで、ユダヤ人を治める王としてローマはヘロデ家を重んじ、ヘロデ家もローマによる統治を受け入れながら統治していました。為政者であり、かつユダヤ教に精通しているのです。そこでフェストゥスが、アグリッパに相談を持ち掛けます。

¹⁴ 二人がそこに何日も滞在していたので、フェストゥスはパウロの件を王に持ち出して、次のように言った。「フェリクスが囚人として残して行った男が一人います。¹⁵ 私がエルサレムに行ったとき、祭司長たちとユダヤ人の長老たちが、その男のことを私に訴え出て、罪に定めるよう求めました。¹⁶ そこで、私は彼らにこう答えました。『訴えられている者が、告発する者たちの前で訴えについて弁明する機会が与えられずに、引き渡されるということは、ローマ人の慣習にはない。』¹⁷ それで、訴える者たちがともにこちらに来たので、私は時を移さず、その翌日に裁判の席に着いて、その男を出廷させました。¹⁸ 告発者たちは立ち上がりましたが、彼について私が予測していたような犯罪についての告発理由は、何一つ申し立てませんでした。

そうなんです、千人隊長もこれだけの騒動が起こっているのだから、相当の罪を犯しているに違いないと思っていたのですが、だんだん、そうではないことが分かってきました。フェストゥスも同じです、これだけ訴えているのならば法に触れるようなことをしていると思っていましたが、何一つ申し立てることができませんでした。

¹⁹ ただ、彼と言い争っている点は、彼ら自身の宗教に関する事、また死んでしまったイエスという者のことで、そのイエスが生きるとパウロは主張しているのです。

ここで、フェストゥスにとって、ユダヤ教の事について彼らが言い争っていることについては分かりましたが、どう裁けばよいか見当がつかせませんでした。そして、パウロが、「死んでしまったイエスという者のことで、そのイエスが生きている」ということ、これは理解できたのです。言い換えると、全く世俗的なフェストゥスであっても、イエスが生きているということをパウロが主張しているというところまでは理解できたのです。

全く関心のない人、目に見えることしか信じない人であるとかは、見えるものも見えません。私の大学はミッション系で、プロテスタントでしたが、たまたま高校の卒業生会で、大学が同じという先輩に会いました。その時に、大学がプロテスタントだということさえも分かりませんでした。宗教部の方々は、週ごとにみことばを掲示板に掲げ、チャペルは毎日開かれており、礼拝があります。それでも、関心のない多くの人にとっては風景でしかなく、あるのにないかのようにみなしていくと思います。しかし、そういった人々であっても、それでもキリスト者はこうなんだよね、こういうことを信じているんだよね、と分かる特徴があります。というか、そうであるべき特徴です。

一つに、「互いに愛する」ということがあるでしょう。「ヨハ 13:34-35 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35 互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」互いに愛することによって、世がイエス様の弟子であることが分かるということです。初代教父テルトゥリアヌスは、異教の中の憎しみ合う文化の中で、キリスト者たちが、「どれだけ、彼らは愛し合っているのか？」ということで、評価を受けるはずであることを書いています。けれども残念なことに、教会史において愛し合うどころか、時には殺し合うことさえ起こりました。だから、キリスト教なんか、として福音の真理から遠ざかる人々が多いのです。

時々、私たちの教会ということではなく、一般的にですが、「こんなことをしているから、この教会には人が来ないのだ。」と批評する声を聴きます。けれども、そういった批評によってかえって、人が教会から遠ざかっているということを知るべきでしょう。何が正しいか？ではなく、互いに愛し合っているということによって、世の人はキリストの弟子であることを知るのです。

そして、世の人が知っているのは、「そのイエスが生きています」と主張しているということです。もちろん、世の人はイエスが世に実在していたとしても、とうの昔に死んでいると思っています。けれども、キリスト者を見ると、イエスは今も生きていますと信じているのだと分かる、ということです。ここで大事なことは、生き返ったという過去形にしていないことです。「そのイエスが生きています」ということです。旧約の時代にも、例えばエリヤやエリシャは、死んだ人を生き返らせました。主ご自身も、ヤイロの娘やラザロなどを生き返らせました。けれども、その後で同じ肉の体を持っているので、死に絶えてしまいます。主イエスのみが、二度と朽ちない体をもってよみがえられたのです。だから、今も生きています。

このことが、他の人々、世の人々が見てわかるでしょうか？この人は、死んで存在していないはずのイエスが、共にいるということを信じているな、と分かるでしょうか？それとも、イエスは過去の人で、その人を思い出しているだけだとみなすでしょうか？その違いは、私たちは本当に、この方はよみがえられ、今も生きておられ、戻って来られる時に自分もよみがえるという希望を持っているかどうかにかかっています。「Ⅰペテ 1:3 私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。」生ける望みです。主が今も生きておられ、これから戻って来られて私たちをよみがえらせてくださる、という望みです。また、世界もよみがえられます。自然も元のように回復していただきます。土に落ちる種のように死んでいく世に私たちは生きていますが、しかし、そこから芽が出て、茎が生えて、葉が出てきて、花を咲かせて実を結ぶという、復活の希望を抱いています。

ところが、もしそうではなく、イエスが生きておられるということを信じないでいるかのように生きていけば、今の生活も刹那的になります。今さえよければよいのだ、と思います。永遠のためには動きません。信じているといっても、もう昔の人であるかのように人々には見えるでしょう。パウロは、コリント人にこのように言いました。「Ⅰコリ 15:31-32 兄弟たち。私たちの主キリスト・イエスにあって私が抱いている、あなたがたについての誇りにかけて言いますが、私は日々死んでいるのです。32 もし私が人間の考えからエペソで獣と戦ったのなら、何の得があったでしょう。もし死者がよみがえらないのなら、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから」ということになります。」エペソで獣と戦ったというのは、劇場のことを指しています。劇場で殺されそうになるぐらいの騒動になりました。それでも、今、生きており、そして福音を語っているのは、復活するという希望があるからです。自分の今の労苦、苦しみに報いがあると信じているからです。もし、死者がよみがえらず、イエスもよみがえっていなければ、どうせ明日は死ぬのだから、食べたり飲んだりしようではないか、ということになります。このようにしてフェストゥスは、イエスが今も生きていますという主張に関わらざるを得なくなったのです。

²⁰ このような問題をどう取り調べたらよいか、私には見当がつかないので、彼に『エルサレムに行

き、そこでこの件について裁判を受けたいか』と尋ねました。²¹するとパウロは、皇帝の判決を受けるまで保護してほしいと訴えたので、彼をカエサルのもとに送る時まで保護しておくように命じました。」²² アグリッパがフェストゥスに「私も、その男の話を聞いてみたいものです」と言ったので、フェストゥスは、「では、明日お聞きください」と言った。

アグリッパは、この話は聞いてみたいと興味を示しました。パウロの五人目の証言になります。ユダヤ人の前、総督の前だけでなく、王の前での証言です。

2B 見つからない訴える理由 23-27

²³ 翌日、アグリッパとベルニケは大いに威儀を正して到着し、千人隊長たちや町の有力者たちとともに謁見室に入った。そして、フェストゥスが命じると、パウロが連れて来られた。

フェストと異なり、フェストゥスは時を移さず、パウロの弁明を設定しました。ユダヤ人たちの訴えも、カイサリアに戻ったらすぐに出廷させ、アグリッパの前にも次の日にこのようにして出て来るようにさせました。アグリッパとベルニケは、この時を利用して、自分たちの威厳を知らしめるために威儀を正してきていますね。けれども、パウロにとっては、相手が誰であっても関係ありません。自分の前にいる人が、神に立ち返り、キリストが死なれよみがえられたことを信じることにより、罪を赦していただき、永遠の御国の中に入ってほしいということだけです。

²⁴ フェストゥスは言った。「アグリッパ王、ならびにご列席の皆さん、この者をご覧ください。多くのユダヤ人たちがみな、エルサレムでもここでも、もはや生かしておくべきではないと叫び、私に訴えてきたのは、この者です。²⁵ 私の理解するところでは、彼は死罪に当たることは何一つしていません。ただ、彼自身が皇帝に上訴したので、私は彼を送ることに決めました。²⁶ところが、彼について、わが君に書き送るべき確かな事柄が何もありません。それで皆さんの前に、わけてもアグリッパ王、あなたの前に、彼を引き出しました。こうして取り調べることで、何か私が書き送るべきことを得たいのです。²⁷ 囚人を送るのに、訴える理由を示さないのは、道理に合わないと思うのです。」

先ほど説明したとおりです。フェストゥスは、第一に、パウロを巡ってユダヤ人が、生かすべきではないと叫んで訴えているということ。第二に、死罪に当たるようなことはしていないこと。第三に、皇帝に上訴したけれども、訴状に書くべき内容が見つからないことです。それで、ユダヤ教に精通しているアグリッパに、公式の裁判ではないけれども聞いてもらい、何か見つかるかどうかを調べてもらいます。次回、26章を見ていきますが、アグリッパも「26:31 あの人、死や、投獄に値することは何もしていない。」と結論付けました。フェストゥスの目的は達成されませんでした。パウロの目的は達成されます。証しの機会が増えたことです。私たちは、今の自分の生活を主の働いておられることを証する機会としているかどうか、確かめてみましょう。実は恵みが十分にあることを知ってください。